

エネルギー管理:

CO2の増加が止まらない、日本付近の大気中濃度が過去最高に

<http://www.itmedia.co.jp/smartjapan/articles/1606/08/news039.html>

地球温暖化につながる大気中CO2濃度の上昇が続いている。気象庁の調査結果で2015年の日本付近のCO2濃度は、地上、上空、海面の全ての観測点で過去最高を記録したことが分かった。

2016年06月08日 07時00分 更新

[陰山遼将, スマートジャパン]

気象庁が2016年5月発表した調査結果で、日本付近の大気中のCO2濃度は引き続き上昇傾向にあることが分かった。国内の地上観測地点、日本南東の上空大気、日本の南方海上における冬季の海面のいずれにおいても、2015年のCO2濃度は過去最高を記録した。

陸上大気の調査観測地点は「綾里」(岩手県大船渡市)、「南鳥島」(東京都小笠原村)「与那国島」(沖縄県八重山郡)の3カ所。それぞれの観測地点における2015年のCO2濃度の年平均値は、順に403.1ppm(前年比+1.8)、401.4ppm(同+1.9)、403.8ppm(同+2.0)と過去最高を更新した。

綾里と与那国島の年平均値が400ppmを超えたのは2014年だが、今回の調査で南鳥島でも初めて400ppmを超えた(図1)。年平均値の前年からの増加量は、近年の世界的な年増加量と同程度としているが、CO2濃度の上昇が続いていることが分かる。なお、2016年4月の月平均値でも3地点全てで過去最高の濃度を更新している。

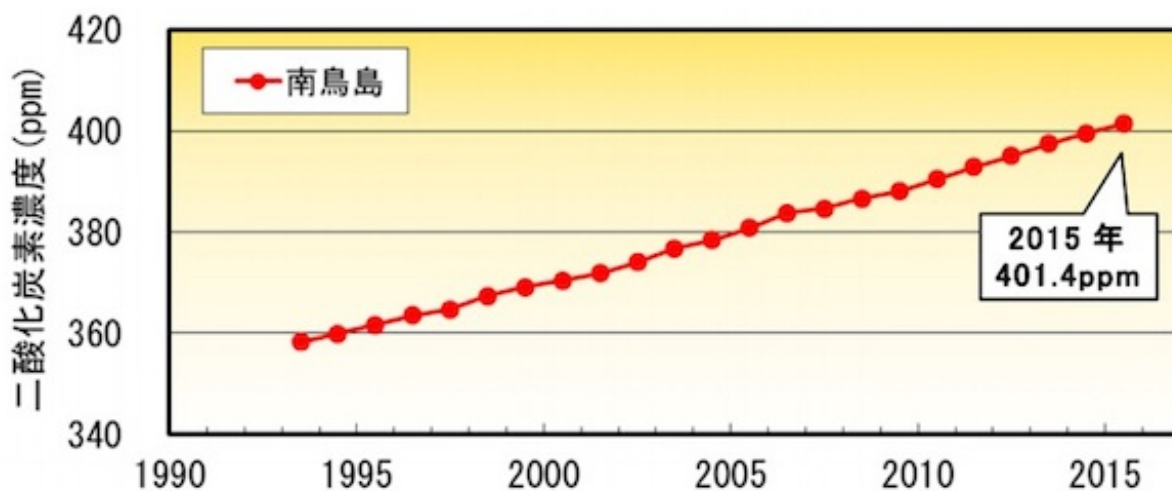


図1 南鳥島における大気中CO2濃度の変化 出典:気象庁

上空も過去最高

上空のCO2濃度は神奈川県綾瀬市から南鳥島の上空6キロメートル付近の大気を、航空機を使って観測している。2016年4月の経路上の平均値は406.9ppmと過去最高になった(図2)。

上空 6km 付近 (神奈川県綾瀬市 - 南鳥島間)



図2 上空のCO2濃度の調査結果 出典:気象庁

海上の濃度も過去最高に

気象庁では海洋気象観測船(凌風丸・啓風丸)を利用し、北西太平洋海域の洋上大気および表面海水中のCO2濃度の観測を1981年から継続している。2016年冬季の洋上大気中のCO2濃度の平均値(東経137度線に沿って北緯7度~33度の間で平均した値)は、404.5ppmで前回の調査に引き続き過去最高を更新した。

一方、表面海水中のCO2濃度も、大気中と同程度の割合で増加し続けている結果となった。また、冬季のこの海域(東経137度線および東経165度線)では洋上大気中の濃度が表面海水中の濃度を上回っているため、海洋が大気からCO2を吸収して蓄積していることが示唆されている(図3)。

海上(東経137度線、東経165度線)

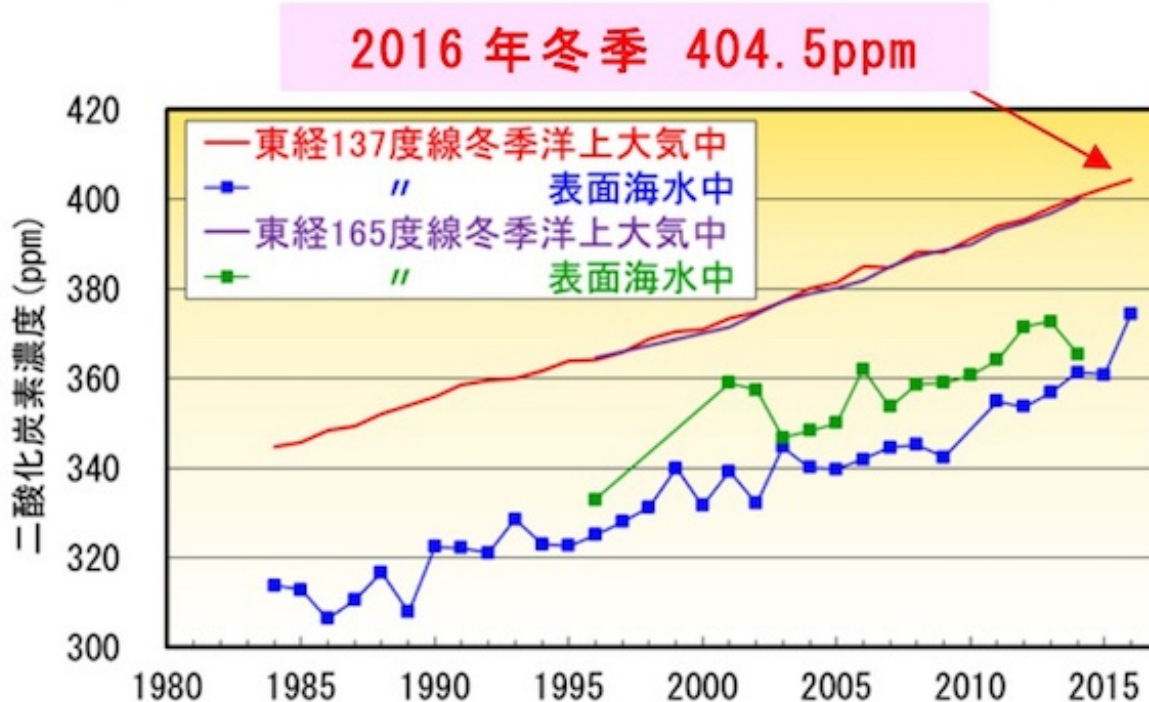


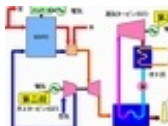
図3 海上のCO2濃度の調査結果 出典:気象庁

関連記事



[電力のCO2排出量を34%削減へ、閣議決定した「地球温暖化対策計画」](#)

政府は国全体の温室効果ガス排出量を2030年度に26%削減するため「地球温暖化対策計画」を閣議決定した。産業から家庭まで含めて省エネルギー対策を推進していく。温室効果ガスの4割を排出する電力の分野では、再生可能エネルギーを中心に低炭素電源の拡大が最重要のテーマになる。



[二酸化炭素を出さない石炭火力、実現は間に合うか](#)

石炭火力は低コストで安定的に運用できるため、大量に導入されている。より発電効率を高めつつ、これ以上の排出が許されない二酸化炭素を削減するための10年計画が進行中だ。残る5年で一気に実証試験を進めていく。



[国が打ち出す2つのエネルギー戦略、2030年と2050年の長期目標実現へ](#)

経済産業省と内閣府がエネルギー分野の長期戦略を相次いで発表した。経済産業省は省エネの推進と再エネの拡大を中心に2030年のエネルギーミックスを実現するための施策をまとめた。内閣府は2050年までに温室効果ガスを大幅に削減する革新的なエネルギー関連技術の研究開発を推進する。

Copyright © 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

